

# 人生100年時代の楽しみ方

第11回

## デマや炎上を防ぐネットリテラシー

篠原 克周

フリーランスライター

ロンドンビジネススクールの教授、リンダ・グラットンが著した本『LIFE SHIFT — 100年時代の人生戦略』が注目され、日本でも「人生100年時代」という考えが知られるようになりました。みなさんは、もし100歳まで生きるとしたら、どんな人生を送ってみたいですか。ここでは、人生100年時代を楽しむための、ヒントやアイデアを探ります。第11回のテーマは「デマや炎上を防ぐネットリテラシー」です。

### ●自身のリツイート、シェアに注意すべし

インターネットやスマホが広く普及したことで、子どもから高齢者までITのメリットを享受して豊かな生活が送れるようになりました。ところが、便利になった反面、これまでになかったトラブルも発生しています。高額請求や不正決済などのネット詐欺、デマや誹謗中傷による「炎上」、個人情報や企業の機密情報の流出などです。インターネットを活用していると、知らず知らずのうち犯罪に巻き込まれたり、意図せずとも思わぬ発言からデマを拡散させたり、自分が加害者になってしまうこともあります。これらを予防するために大切なのが「ネットリテラシー」(ITリテラシーとも)です。

インターネットは便利ですが、危険や嘘も多く存在しているので、嘘を嘘と見抜く力をはじめ、人に迷惑をかけないマナーやエチケット、モラルや倫理観などが必要になってきます。これらを駆使して情報を受け取り、情報を書き込む、つまり「インターネット上にある情報を適切に使いこなす能力」がネットリテラシーです。

最近では中高年層も、FacebookやTwitter、Instagram、LINEなどを利用する人が増えているので、今回はSNSで起こるデマや「炎上」を防ぐネットリテラシーについて話を進めてみます。炎上とは、インターネット上で非難や批判が殺到し収拾がつかなくなることです。火が勢いよく燃え広がるようにネガティブな情報が拡散されていくので、この表現が使われるようになりました。

炎上が起こるきっかけは、不謹慎な行動や不祥事、失言、詭弁、虚偽の情報発信です。被害が大きくなるにつれ、個人なら心理的な被害、企業なら経済的な損害にまで発展するケースもあるので自身の発言やリツイート、シェアなどには注意しておくべきでしょう。

### ●「嘘を嘘として見抜く力」を養う

2019年に起こった「常磐道あおり運転事件」では、ネット上で犯人捜しが始まり、犯人と特定された女性の実名がさらされると、正義感に駆られた人がSNSでリツイートやシェアで拡散。ところがこれはフェイク情報、いわゆるデマでした。犯人扱いされた女性のSNSには「死ね」「殺す」などの脅迫文がダイレクトメッセージで届き、彼女が代表を務める会社には嫌がらせの電話が殺到。「ネットリンチ」になりました。危機感を覚えた女性は、すぐに弁護士の手を借り、デマを拡散している人たちに刑事・民事両面から法的措置の検討を公表。会社のホームページでデマを強く否定した後、記者会見を開き、悪質な投稿者に対しては慰謝料を請求(和解が成立)、それでやっと騒ぎが

## ■ 疑わしい情報を判断するヒント

### デマに含まれやすい表現

強調表現「非常に、かなり、すごく、絶対、重大な」  
不安を煽る表現「危険な、悪質な、大変な」  
急がせる表現「即、大至急」など。

### 悪意ある拡散の要求の例

「見てから○時間以内に□人に回さないと不幸になります」  
「この情報を止めた人は特定され、襲われます（捕まります）」等

### 善意による拡散の要求の例

「ペットショップがつぶれたので、もらってくれそうな人に広めてください」  
「被害を未然に防ぐために、知り合い全員に共有してください」等

（警視庁 サイバー犯罪対策課 対策係のサイトより）



沈静化しました。

2016年に発生した熊本地震直後には、動物園からライオンが逃げたというデマと写真がTwitterに投稿されて拡散。情報の真偽を確かめようと多くの人が動物園に電話をかけました。これにより動物園は業務に支障を来し、投稿者の会社員の男性は、業務妨害の疑いで逮捕されました（不起訴処分）。ライオンの画像はインターネットで入手した映画のワンシーンで、男性は「見た人をびっくりさせたかった」と容疑を認めました。

結局、問題の投稿は、2万回以上リツイートされましたが、その一方で、初っ端から「これは嘘だ」「悪ふざけのネタだ」「以前この画像をネットで見たことがある」と見抜いていた人たちもいました。つまり嘘を嘘として見抜くネットリテラシーがあるかないかが重要なポイントになったわけです。

SNSでのトラブルを防止するには、ネットの扱いに不慣れな中高年層も「嘘を嘘として見抜く力」を養う必要があります。もう一つはデマの拡散に加担しないようにすることです。過剰な正義感や使命感が湧く気持ちも理解できますが、情報を見ても慌てず冷静になることが大切です。

警視庁のサイトでは「疑わしい情報を判断するヒント」として「強調表現、不安をあおる表現や

急がせる表現が多い」「生命や金銭に関わる内容が悪用される」「情報源が記載されていない」「伝聞形式で書かれている」「拡散を勧めている」をあげています。

最近だと新型コロナウイルスに関するフェイクニュースも出回りました。「コロナは26～27度の温度で死ぬ」や「トイレトペーパーが品薄になる」などです。インパクトのある情報は、善意から急いで教えたくりますが、インターネット上に流れる情報は全てが真実とは限りません。もし嘘の情報や根拠のない情報を拡散してしまうと、自分自身の信頼を損ねたり、風説の流布や犯罪に加担してしまうことになったり、最悪の場合は企業に賠償請求をされることになります。

ネットやSNSで情報を受け取ったら、リツイートやシェアで拡散する前に、まずは公的機関（政府、都道府県庁、区市町村／新聞社、テレビ局、ラジオ局／気象庁）など信頼できる発信元からのものか、ファクトチェックしてください。間違えた時の影響力を想像し、情報発信には責任が伴うことも意識しましょう。コロナ禍をきっかけに中高年層のインターネット利用も進んでいるので、これからの社会を生きていくためにも、ぜひネットリテラシーの強化に取り組んでください。